

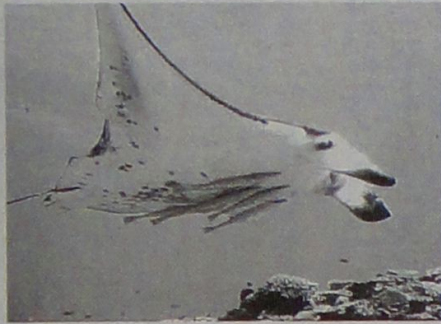
文化

マンタほど優雅な泳ぎを見せる魚はいない。エイの仲間では最も体が大きく、私の住む沖縄県石垣島近海では、左右に大きく広げた胸びれの幅が、大きな雌で4メートルを超える。体重は500キログラムを超えるものもある。

8〜10月が遭遇最盛期 性質はおとなしく、オキアミなどのプランクトンを大きな口で大量に捕食する。近年、このマンタにも2つの種類がある

ことを海外の研究者が突き止めた。沖縄の周辺を泳ぐマンタは、従来のオニイトマキエイに替わって、ナンヨウマンタという学名で呼ばれている。ダイバーにとって、マンタは憧れの的である。

マンタは何匹ものコバンザメを腹に従えて悠然と泳ぐ。4メートルの巨体がダイバーの頭上にさしかかれば、あたりの空気が一変してしまふ。この空気がふわふわするようなマンタとの出合いは、初めての人には、まさに「未知の遭遇」である。



コバンザメを従えて泳ぐマンタ (筆者撮影)

マンタ舞う海守り残す

◇石垣島の遊泳場所を発見、観察にルール◇

園田 真



から20センチ、サンゴに囲まれた小高い根が広がっている。その根の上に、ひらひらとマンタがやって来たのである。

沖合には、一年を通じて多くのマンタが集まり、特に8月から10月にかけては最盛期。この時期に潜れば8割から9割以上の確率でマンタを見ることのできる。しかし30年前は、ここにマンタが集まるとは地元ダイビング関係者も知らなかった。

1980年代の前半、川平のダイビングショップで働いていた私は、「川平石崎の沖でマンタをよく見る」という噂を地元

場所を覚えて何度も潜った。すると周囲の根にもマンタが、回遊してくる。根の上でゆっくり胸びれを羽ばたかせ、ホンソメワケベラなどの小魚に、エラや口の中にいる寄生虫を捕食させているのである。それからというものの、10枚以上のマン

ダイビング雑誌でこのスポットを紹介すると、石垣中のショップの船が一斉に集まってきた。東京・渋谷のスクランブル交差点にちなんで「川平石崎マンタスクランブル」と命名したのもこのころ。しかし、あまりに有名になったため、シーズンには20艘以上もの船が集結し、海中は人間スクランブルとなることもたびたびだ。

増えるダイバーを嫌がってマンタが来なくならないか、心配だった。マンタを見たダイバーは、少しでも近づこうと全速力で泳いでいく。マンタの来る根の上で待ち構える人さえいる。これではマンタが驚いて逃げてしまふ。川平の他のショップとも協力して、観察のルールを取り決めた。マンタを追いかけない。マンタに触れない。根の下に着底し、姿勢を低くして観察する。

場だったミクロネシアのパラオのダイビング協議会から、マンタ観察のルールについて問い合わせを受けるまでになった。これを機にダイビングショップ間の連携を深め、環境保護でも協力しようとする。99年、石垣島と周囲の島の業者と一緒に八重山ダイビング協会を設立した。今では、サンゴの天敵であるオニヒトデの駆除などに手を携えて取り組んでいる。

懸命に泳ぐ赤ちゃん。これからはマンタに恋の季節が訪れる。大きな雌の後を、一回り小さな雄が追いかけて回す。交尾から1年して、わずかに

1匹の子供を産む。雌のおなかから出てくる時は、幅が1メートルを超え、重さも50〜70キログラム程度。海に出たその時から、子供は大海を自力で泳いでいく。貴重な赤ちゃんも、定置網にかかったりして命を落とすことが多い。南洋の島では、マンタを食用にするため網で捕獲するところもある。

生まれて間もないマンタが懸命に泳いでいる姿に出会うと、本当にうれしい。「大きく育って」と祈らずにはいられない。マンタ舞う美しい海をいつまでも残したい。それが私たちの悲願である。(そのだ・まこと「八重山ダイビング協会会長」)

の漁師から聞きつけた。85年、独立して今の「ダイビングスクール海講座」の前身となる店を島で開いてからは、来る日も来る日もその沖合を東西1キロメートルにわたって潜り続けた。

沖合1キロ近くの砂地に長い根が分岐しながら沖に向かって伸びている場所があった。水深は10メートル

タがそこら中で舞う光景を何度となく目撃する。追いかけて、触れない1年間は、どこのショップにも知らせずにガイドをしていたが、87年に

これを徹底し、他の地区にも呼びかけていったおかげで、今もマンタは着実にやってくる。近年はマンタダイビングの本

1匹の子供を産む。雌のおなかから出てくる時は、幅が1メートルを超え、重さも50〜70キログラム程度。海に出たその時から、子供は大海を自力で泳いでいく。貴重な赤ちゃんも、定置網にかかったりして命を落とすことが多い。南洋の島では、マンタを食用にするため網で捕獲するところもある。